

「水のまち」郡上八幡

10月8日レポート『郡上八幡 伝統に生きる』の続きである。
郡上八幡はなんと言っても「水のまち」だ。

近世初期に入って郡上八幡は城下町として栄えてきたのだが、
そこで問題になったのは大火である。城下町という人口稠密地に
住む人々にとって、防火は生活防衛上切実だった。

このことは当然、為政者側も同様であった。1652（承応元）年、
横町から出火した火災は、またたく間に横町、本町、鍛冶屋町を
焼けつくす大火となってしまった。これを機に、第六代目城主遠
藤常友は、川から水を引いて防火用の用水を建設し、町筋に沿っ
て用水路網を整備した。以後、郡上八幡の都市計画は用水路網の
拡張を伴った。近代に入った1919（大正8）年にも大火は起き、
商家が建ち並ぶ北町一帯をたちまちにして焼き尽くした。その直
後、取水口の変更や水路の改修による水量の増量、さらなる水路
網の拡張がなされ、現在いわれる「水のまち」の下地ができあが
った。

現在の郡上八幡が「水のまち」と呼ばれるゆえんは、湧水や用
水の存在だけではない。市街地を二分する吉田川、その吉田川が
合流する本流の長良川も「水のまち」という特徴に欠かすことが
できない。アユ・アマゴなどの川魚は、山間部での食卓の主要な
タンパク源であった。保存が効くアユは、町内だけでなく、町外へも売られた。郡上の
アユが本格的に町外に流通しはじめたのは、大正期からである。その当時、地元のある
老舗の魚問屋が職漁師から集めたアユを氷で冷やし、大八車に乗せて美濃まで運び、そ
の後川舟で岐阜の市場に送ったという。それらは「郡上アユ」として、岐阜の仲買人の
手を経由して鉄道で東京まで運ばれ、高級料亭で高値で引き取られた。現在でも全国的
に有名な「郡上アユ」のブランド化は、この頃からすでに確立されたのだった。

現在の郡上八幡の「水のまち」という特徴は、城下町にはりめぐらされた用水と住民
とのつきあい（水循環システム）と、川魚を商品化するまでに高められた独自の釣り文
化とが組み合わさった、水をめぐる生活文化に由来しているのである。



写真1-4 いがわ小径
（八幡町左京町、2008年11月13日撮影）
高谷用水の上流部。吉田川から水を引いている

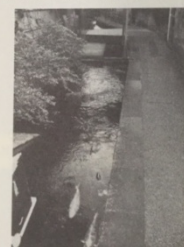


写真1-5 いがわ小径（同上）
用水では住民が水を引く。上方は美濃の浅い川



写真1-14 吉田川で遊ぶ人々
（八幡町左京町、2008年8月2日撮影）
アユ釣りを楽しむ釣り人のそばで、家族連れが泳ぐ

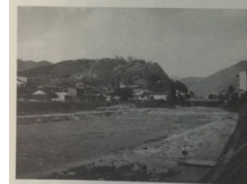


写真1-15 吉田川
（八幡町新町、1993年6月21日撮影）
町を二分して流れる。中央が城山、その山頂に郡
上八幡城。右奥の建物が宮ヶ瀬橋

（2016年11月14日）